

関西View

日本経済新聞

夕刊
2月3日
(月曜日)

発行所 日本経済新聞社
東京本社 ☎(03)3270-0251
〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
大阪本社 ☎(06)6943-7111
名古屋支社 ☎(052)243-3311
西部支社 ☎(092)473-3300
電子版アドレス
http://www.nikkei.com/
購読のお申し込み
☎0120-21-4946
http://www.nikkei4946.com

滋賀県南部の「田上山」は日本で近代的な砂防工事が発祥した地といわれる。いまでも緑に覆われた山容も、戦後しばらくは裸地化し、「雪山のよう」と例えられた。森林が回復し下流域に土砂の流出を抑え込めるようになるまでに、100年を超す治山・

軌跡

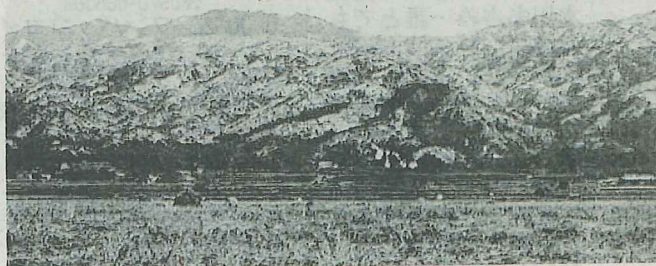
治水の取り組みがあった。

「私が京都大学の院生だった1970年代、小さな鎌があれば山の中に入っていたけど、今はうっそうとして簡単に入れなくなった」

砂防学が専門の水山高久・京大教授は、田上山の森林の回復ぶりに目を見張る。

瀬田川流域の標高400、

滋賀・田上山 森林再生の100年 ①



600以上の一帯は田上山と呼ばれ、人の手が入る前はスギやヒノキなどが茂る美林だった。694年に都となる藤原

京造営の際、宇治川や木津川を経てこの地の木々を利用してきると伐採が始まり、奈良まで運び出された。その作業を詠んだ歌が万葉集に残る。

その後も平城京、平安京の造営が続き、神社仏閣の建立やまき燃料の採取などで伐採はどんどん進んだ。花こう岩が風化した「マサ土」と呼ばれる表面の土は雨が降るたびに流出。岩肌には植物は根付かず桃山時代には、はげ山になったと考えられている。

瀬田川には土砂がたまり、降雨のたびに水害を起こす。江戸幕府は1666年に山林の保護を目的に「諸国山川掟

植林が始まる明治期の田上山の様子(国土交通省琵琶湖河川事務所提供)

伐採根こそぎ、土砂流出

(おきて)の令」を發布したが、日々の生活に田上山のまきは欠かせず、事態はいっこうに改善しなかった。

本格的な砂防対策は、明治政府になって始まった。瀬田川を含む淀川流域で国有林化を進め、県境をまたぐ治山治水工事を内務省直轄とした。1878年のことだ。

確立した工法や重機械のない時代。砂防に情熱をかける人たちが工夫を凝らす。その一人が京都府の土木技師、市川義方だ。山肌を階段状に整えてマツなどの苗を植えやすくする「積苗工」を考案。木津川流域の山腹で実績を重ねるの事業に取り入れられた。市川に学んだ内務省の土木技師、井上清太郎は1894年から30年間にわたり田上山

を中心とした砂防工事の監督と指導を続けた。晩年には地元の人たちから「田上山の砂防さん」と呼ばれ敬愛された。

1984、86年に建設省琵琶湖工事事務所(現在は国土交通省琵琶湖河川事務所)の所長を務めた竹林征三・風土工学デザイン研究所理事長は、先人の遺業を調べた。

マサ土でも育ちやすい植物、ヒメヤシヤブシを見つけた西川作平やその苗を普及させた龍池藤兵衛、砂防タムの建設に力を尽くした田辺義三郎らを見いだした「田上山七賢人」と名付けた。竹林理事長は「長年の努力に学び、山を守り続けなければいけない」と話す。

編集委員 永田好生が担当します。